

匠

たくみ

水郷柳川には、その道の匠がいる。



【写真左上】現場で型を作る松藤さん【写真右上】送電用の装置を電柱に固定する部品の木型【写真右】娘婿の橋爪正彦さん（手前）を指導する松藤さん。正彦さんはわずか6年の経験ながら、松藤さんの信頼は厚い

木型師
松藤 茂弘さん (68歳・明野)

半端な技術では生き残っていけない

「型は図面通りに作ればいいってものじゃありません。作業効率や鉄が隅々まで流れ込むように考えて作らないといけない。図面を見て頭の中で型をイメージして、何通りもの作り方の中からその型に一番合った作り方を選びます」と型作りの難しさを語る松藤さん。

「1つの型で何万个もの製品ができます。そのため、同じ型の注文が入ることはまずありません。毎回新しい図面を見て、作り方を考えるのは大変だけど、その分、お客さんから褒められたときのうれしさは何ものにも代えがたいです」と仕事の面白さや達成感について話してくれました。

松藤さんは現在、娘婿の橋爪正彦さんに木型作りの技術を伝えています。「中途半端な技術では生き残っていけない業界です。あそこ任せとておけば間違いないと言われるまでにならないと。娘婿にはそこまでなつてほしいですね」と正彦さんにエールを送る松藤さん。

最後に「この受章をきっかけに少しでも多くの人に私たちの仕事を知ってもらえればうれしいです」と胸の内を語ってくれました。

型はすべての製品作りの出発点

「同業者から祝福の連絡がくるとやっぱりうれしいですね」と受章の喜びを語るのには、木型製造業を営む松藤さん。製造用の型に必要な木型を作つて45年の職人です。

松藤さんは、この仕事を始める以前、父の三男さんと共に鉄工所に勤務していました。昭和41年、三男さんが木型の製造業で独立。半年後、三男さんの仕事が忙しくなつたため、松藤さんも退職して仕事を手伝うようになりました。

型作りは、すべての製品作りの出発点。糸のこやノミで0.1ミリメートル単位の長さや角度などを調整する作業は、長年の経験が必要

で、職人として一人前になるには最低10年はかかるそうです。

1つの型が何万もの製品を生む

「染物は染める工程はもちろんだけど、一番大事なのりのり作り」と話す田中さん。染物に使うのりは、もち米の粉を煮たものに数種類の薬品を混ぜて作ります。生地によって薬品の配合は微妙に変えるそうです。のりの出来が悪いと乾燥させるときにのりが腐つてしまい、きれいに柄や文字が出ないのだとか。のりの出来は、田中さんの舌で確かめます。「こればかりは長年磨いた感覚だけが頼り。マ

染物の出来はのりが決める

「自分の技術が認められて光栄です」と喜びを語る田中さんは、この道61年。小学生のころ、先代の父が戦争に行ったため、一人で染物をしていた母の手伝いをしたのが染物を始めたきっかけです。田中さんは、高校1年生の時、染物一本でやっつこうと決心し、高校を中退。どうせやるなら先代を超える技術を身につけようと、福岡、大阪、岐阜の染物屋で修業して腕を磨きました。

手染めは、のりを作るところから始まります。生地に描かれた柄や文字をのりで縁取つて乾燥させ、染料に浸して着色。その後、のりを洗い流して乾かせば完成です。



【写真左上】生地にのり付けをする田中さん【写真右上】のりで描いた模様。染料が生地に染み込まないようのり付けする【写真右】水でのりを落とす作業。うまく文字や模様が出ているか毎回緊張するそうです

「手染めは機械染めと違って、完成してみないと出来栄が分からない。そこが難しいところだけど、思い通りに出来上がったときは最高にうれしいですね」と手染めの面白さを語る田中さん。最後に「時代と共に染物屋も進化しないとけない。息子や孫には、私が持っている技術だけでなく、さらに新しい技術もしっかり習得してもらいたいです」と次の世代にメッセージを送りました。

ニューアルがあるわけではないですから」と田中さんは、のり作りの難しさを語ります。現在、息子と孫に店を任せる田中さんですが、今でものりの出来栄だけは自分で確認しているそうです。

染物師
田中 昌二さん (77歳・鷹ノ尾)

時代と共に染物屋も進化しないといけない

市は、長年にわたり同じ職業で技能や技術を磨き、後継者の指導育成にあたるなど、市の産業振興に貢献した技能功労者を表彰しています。昨年12月13日に、4回目の技能功労者表彰式がありました。今回、受章した2人の「水郷柳川の匠」を紹介します。

柳川市技能功労者表彰

